

【エッセイ部門・最優秀賞】

世間の大人の皆様へ

山梨県立甲府東高等学校 第3学年 北條七海

「コロナ禍に高校生だった子たちはかわいそうだね。」

ニュースのコメンテーターも SNS 上の大人もそろいもそろって口にするのは同じこと。うんざりする。しかし、この手のセリフは私がこの先社会に出た時も言われ続けるはずだ。そして多くの大人は続けてこう言う。

「行事にも制限があって大変だし、思いっきり楽しめなくて残念だね。今が一番楽しい時なのに。」

私の母だってそんな大人の一人だ。母にそう言われた時思わず

「今高校生じゃない母さんにそんなこと言われたくない。今の高校生が自分たちのことをかわいそうだというのは別にいいけど、コロナ禍の高校生を経験していない大人にそう言われるのは嫌だ。」

と言った。コロナ禍でも高校生活を楽しんでいた私にとって、「かわいそう」と言われたことは、母に私が高校生活を楽しんでいることがあまり伝わっていないように思えて少し悲しかった。

おそらく世間の大人は今の高校生をかわいそうだと思っている。しかし、高校生自身はどう思っているのだろうか。私自身、中学校の卒業式も高校の入学式もまともにやらしてもらえないかわいそうな世代だと思っていた頃もあったが、今は一度きりの高校生活をどう楽しむかということしか考えていない。ゆえに私は世間の大人に声を大にして言いたい。

「一つの側面だけで今の高校生を理解した気になって、簡単にかわいそうだと言うな。高校生全員がかわいそうだと思っているわけではない。できればコロナ禍でも楽しむことを忘れず、何かできないかと模索している姿を見てたくましいなと言ってほしい。」

ということ。

私が自分自身をかわいそうだと思う考えを改めるきっかけをくれたのは、コロナ禍になって初めての夏に放送されていたドラマのセリフである。「できなかったことを数えるよりも、できたことを数える。」という言葉聞いた瞬間感電したような気がした。このセリフに出会ってから、コロナのせいでできなかったことを数えるよりもできたことを数えながら学校生活を送りたいと考えるようになった。主題歌を好きなアーティストが歌うからという安易な理由で見始めたドラマが、これほど自分の考えに影響を及ぼすとは思っていなかった。

実際にできたことを数えてみると、学園祭や球技大会、スキー教室に修学旅行など形が変わったり、制限があったりしたが、できたことはたくさんあった。特に修学旅行はコロナ禍だからこそ印象深いものになった。修学旅行に行けなかった学校や行けたとしても行

き先を変更した学校がある中で、私の学校は当初の予定通り沖縄へ行けた。これは、とても幸せなことだと思う。帰りのバスの中、窓から都会の見慣れない高層ビルを眺めていたところで私の意識は一度途絶える。再び目を開けるとバスの窓からは見慣れたぶどう畑が見え、一瞬で現実へと引き戻された。沖縄で過ごした四日間は、現実というには五感を刺激するものすべてが新鮮で夢見心地であったが、夢というにはコロナ禍であることが現実を感じさせ、まさに夢うつつだった。ドラマのセリフが私の考えを変えるスイッチで追ったことは間違いない。しかし、きっかけがあったとしても数えられるものがなかったら、今も自分自身のことをかわいそうだと思っていたかもしれない。

人見知りなのに知り合いがほとんどいない高校に進学し、その上コロナ禍に突入したことで入学したばかりの頃は不安と緊張でいっぱいだった。しかし、友人に恵まれ、部活動の部長として部をまとめたり、生徒会役員として学園祭の運営に携わったり、ふたを開けて見れば、コロナ禍以前の中学校生活よりも格段に楽しくて毎日が充実していた。だからこそ「かわいそう」なんていう同情の言葉はいらないし、私の高校生活は「かわいそう」の一言で片付けられるほど惨めで悲しいものではない。コロナ禍で私にだって不満があるし、かわいそうな世代だと思った時もある。終わりの見えないコロナ禍で悲観したまま高校生活が終わるくらいなら、私はいつだって全力で楽しみたい。これを読んだ人は、私が強がっているだけで本当は今もかわいそうだと感じていると思うかもしれない。しかし、私のスマホに残る修学旅行中に撮った四百枚を超える写真と動画すべてが「嘘じゃないよ。」と教えてくれる。特に、ホテルのビーチで遊んでいる時、同じクラスの女子十八人で撮ったたった二十五秒の動画。二十五秒間の中には、マスクをしているが、コロナ禍以前のように友達と「嘘偽りのない」笑顔ではしゃぐ女子高生の姿がある。これは、永遠に残るたった一瞬のきらめきの証。